

ともに見る場所

——「Cinema with Us 2013」に寄せて

三浦哲哉 (映画研究者)

震災1年目の山形で企画された特集上映「Cinema with Us」において、私が実際に足を運んだどの会場も、強い、不思議な緊張感に包まれていたのをよく覚えている。誰もが生々しい記憶を抱えていた時期だったからだが、しかしあの緊張感の特殊性は、スクリーンで映されているのとまったく同様に被災された方と一緒に観ているかもしれない、という状況からきていたのではなかったか。

首都圏から来た観客や関西から来た観客、そして海外から来た観客が、東北の、さらには被災地の至近距離で暮らしていた観客と同じ場を共にし、同じ一つの映像を見ること。そのことが強いる緊張があったのだ。

私がこの映像を見ているのと同じしかたで隣のひとは見ていない。その違和感は、暗闇の中でも皮膚感覚で伝わってくる。方言がわからなければ伝わらない笑いに反応する観客もいれば、そうでない観客もいる。それぞれの距離で、私たちは映像を見た。

私自身も「Image.Fukushima」という、福島をめぐる映画上映プロジェクトを続けるなかで幾度となく再確認してきたことだが、映像作品の価値とは別に、共に映画館で見ること自体の意義があった。山形ではとりわけそのことがはっきりと感じられた。震災という地理的に限定された出来事、とりわけ日本という国の非対称性を露呈させた出来事が、国際映画祭という多種多様な観客の集まる場で上映されたからだ。そのような場で、ひとは映像を自分勝手に消費することなどできない。映画観客が単なる窃視者(安

全な場所でのぞき見をして楽しむ者)でなくなる契機もここにある。

その2年後、再び私たちは同じ場所に集まる。ただし今度は、巨大な出来事が起きた直後の高揚はなくなっている。忘れつつある者と、まだ忘れていないわけではない者。忘れようにも忘れられない者。忘れたことにしたい者。そのような違いを、私たちは感じ取ることになるのではないだろうか。

忘却と風化がこのようにして起きるのだということはこの2年間、私たちは目の当たりにしてきた。たとえば東京オリンピックの開催決定も、その象徴的な出来事であると言えるかもしれない。これから先、煽情的で求心的な一つの日本を示す映像でこの国は充たされるだろう。幻想こそが経済を廻すのだ、そして復興も加速するのだ——そんな主張こそがもっとも現実主義的ということらしい。だが当然ながら、そこからこぼれおちる現実はある。

これからさらに忘却と風化は進み、巨大な幻想によって傷は覆われていくだろう。そのこと自体を否定してみても仕方がないが、しかし、みんなが一つになる、ということではない仕方で集まることのできる場所が確保されることを望まずにられない。自分とは違う現実を生きる他者の存在を確認するための場所。それは私たちにとって映画館のことだ。そこで、無差別的に誰しをも鼓舞する華麗な幻想ではなく、さきやかに現実の断片を拾い集め、私たちの視線のもとに届けてくれる記録映像を共に見たいと思う。

■ディスカッション

「震災をめぐるドキュメンタリー映画のアーカイブ」【CU】

パネリスト：岡田秀則、三浦哲哉、松山秀明／司会：小川直人

..... 10/13 12:30-14:00 [M5] | 入場無料